

悪役令嬢の兄です、ヒロインはそちらです！
こっちに来ないでください 2

Characters

幼少期

シャルティ・サングイス

ルディヴィスの義妹。

「悪役令嬢」になる設定だが
現在その兆候はない。

ヘルリ・ラジエ

攻略対象のひとり。

獣化魔術の実験のせいで
家族から虐げられていた。

ルディヴィス・サングイス

悪役令嬢の義兄。

一家破滅の最悪な運命を回避するため、
義妹や攻略対象者たちと
真摯に向かい合うが……

レオンハルト・ロードヴィリア

乙女ゲームの攻略対象のひとり。

優しく完璧な王子様に見えるが、
周囲を外堀から埋めていくような
策士な一面を持つ。

マイズ・エースメイス

攻略対象のひとり。

大神官の孫で閥属性の持ち主。

イグニス・バイゼル

攻略対象のひとり。近衛騎士団長の息子。
厳しい訓練中に倒れ……!?

目次

悪役令嬢の兄です、ヒロインはそちらです！
こっちに来ないでください 2

7

番外編 大切な今を思い出に残す

295

悪役令嬢の兄です、ヒロインはそちらです！
こっちに来ないでください2

プロローグ

よくネットとかアニメとかで聞いていた異世界転生。

あまり関わりたくない面倒な家族から逃げて、社畜として生活していたおれには関係のない空想の話だと思っていた。

だから自分がまさか階段から落ちて死んで……異世界転生するとは思っていなかったんだ。

その転生先が妹……社畜のおれに無駄なちよっかいをかけてくるクソ妹が好きだった乙女ゲーム『光の聖女へ愛を灯す』の世界だなんて。

神様はおれに恨みでもあったのだろうか？　って本気で考えたこともあった。

階段から落ちて死んだせいなのか、異世界転生してしまったからなのか、正直クソ妹に何をされたのか具体的なことを思い出せない。だが、このゲームの世界に関する記憶が少しずつ蘇ってくる、前世の妹に対して酷い嫌悪感と不快感が溢れてくるのだから、相当クソな妹だったんだろう。

けど、おれは悪役令嬢の兄、ゲーム上ではイラストさえ準備されていなかったモブキャラ、ルディヴィス・サングイスとしてこの乙女ゲームの世界に異世界転生したことを、心から喜んでいる。

悪役令嬢の義妹が聖女を虐め倒して断罪され、その断罪に巻き込まれる形で死ぬ運命のモブに転

生したはずなのに、おれの未来は現状、素晴らしく明るい。

なぜって？　それは破滅する運命を背負った義妹、悪役令嬢シャルティが恐ろしくいい子で可愛い天使だったからだ。

社畜として生きていた前世の記憶を持ったおれを癒してくれる可愛い義妹と出会って、こう決心するのは当然のことだ……何がなんでも悪役令嬢となる未来を変えてやる！　聖女様には普通に攻略対象と恋してもらって、悪役令嬢が断罪されない平和な未来を掴み取ってやる！

乙女ゲームのストーリーを捻じ曲げてでも救いたい可愛さがシャルティにはある。

この目標を胸に、乙女ゲームでは描写の少なかった悪役令嬢が爆誕するまでの幼少期を変えるべく過ごしてきたのだが……何かがおかしい。

義妹のシャルティが悪役令嬢となってしまう原因を変える度に、なぜか本編では名前以外登場しないモブ義兄のおれも攻略対象と深く関わるようになってしまっている。なぜなんだ！？

ゲームでは、シャルティが攻略対象と関わり合うことで将来の断罪に繋がる関係性が生まれていた。それを変えたかっただけなのに……

シャルティがレオンハルト殿下と婚約してしまうきっかけとなったグラス投げつけ事件に介入したら、どういうわけか、モブのおれがレオンハルト殿下の婚約者候補になってしまっている。

男性同士の結婚、乙女ゲームでいいと思ってるんですか！？

いいわけない！　絶対間違っている。

ヒロインっていう可愛い聖女ちゃんがこれから来るのに、何を考えているんだろう……？

いや、その展開があつたからこそ、それを利用してシャルティを婚約破棄事件に巻きこまない肉壁になれているけども……！ ヒロインちゃんがいろんな意味で誤解するから、キスしたいとか言わないでほしいよ、レオンハルト殿下。

ほかにも攻略対象の悪役令嬢の犬にされていた不憫なヘルリを我が家の愛犬兼従者にしたり、汚れ仕事をさせる騎士として悪役令嬢に金で買われる予定だったイグニス^②を、騎士以外の職に進ませてみたり……将来チャラ男になるはずだった大司教の孫のマイズが、何を間違えたのか可愛く成長するのを見守ったり？

妙に距離感が近い攻略対象の皆とシャルティを仲良くさせる計画を挟みつつ、断罪されない人間関係を目指して今日までいろいろやってきた。

モブキャラでしかない悪役令嬢の兄を巻き込むなど思うこともあるが、悪役令嬢キャラと攻略対象者たちが笑顔で集うという絶対^③にありえない展開が生まれている。

まるで、ここが乙女ゲームの舞台に似ているだけの違う世界なのかもしれないと思えるほど、皆、ゲームと違った成長を遂げているんだ。

もしかしたら乙女ゲームの展開じゃない、違う未来が待っているんじゃないかな？ つて……そう思えるほどおれが関わったみんなはいいやつで、大切な友達になっている。

けど、こはやっぱり乙女ゲームの世界だった。

そのストーリーと同じ時期に聖女がこの世界に現れたことが、何よりの証拠だ。

第一章 乙女ゲームの本格的なスタート

新しい聖女が現れたことで、国中が祝福に湧いている。

レルム伯爵家に保護された聖女は、すぐに教会へ入ることを拒んだそうだ。

人々を救うために貴族レベルの学問を学びたい——そう願ひ、学園卒業後に教会で暮らすことを希望したらしい。

そして現在は貴族の暮らしを学びながら、来年の学園への入学準備に入っているらしいと、噂程度に聞いた。

もしや、聖女を利用して何か仕掛けてくるのでは？ と警戒したが、レルム伯爵家は大きな動きを見せることなく、ただ時間だけが平和に流れていく……

ペトラ母様とシャルティを目の敵にしていた、二人の実家であるレルム伯爵家。

現在は、ペトラ母様を追い出した弟のグライドとその妻のマリリンがレルム伯爵を正式に受け継ぎ、まるで何事もなかったかのように領地運営をしているらしい。

父様が言うに、表面上は穏やかな性格だと有名な現レルム伯爵。

その裏の顔はどんな顔をしているんだろうか？

彼がこれまで噂を流してきたのは間違いないはずなのに……確実な証拠はない。

だが、シャルティが不義の子であるという噂が定期的に流れているような状況が続いていたのに、聖女を保護してからはピタリと止んだような気がする。

聖女様に会って状況が変わったのならいいが、何も仕掛けてこないことが逆に恐ろしかった。国と教会から正式に発表があり、聖女様の名前なども判明した。

市街の孤児院で保護された聖女ルチャ様、年はシャルティと同じ現在十五歳。

先代の聖女を超えるほどのかなり強い聖光魔法せいこうまほうを有するという。

その名前は、奇しくも乙女ゲームのテンプレートで付けられていたものと同じだった。それに気づいた瞬間、少しだけ背筋がゾツとした。

おれが現実を見たくないと言を背けても、着実に乙女ゲームの世界が一步步近づいてきている。これまで積み上げてきたものが真実なのかどうか、誰かに問いかけられてる気がしてならない。

そして乙女ゲームでは語られなかった聖女という存在の実情もわかった。

基本的に、聖女様には二つの道が用意されている。

一つは、保護した貴族の下で学園卒業まで過ごしてから教会に入る道。

そしてもう一つは、早い段階から教会に身を置く道だ。

前者は教会へ通いながら聖女としての務めを果たし、成人後は貴族の社交の場に出ることもできる。

後者の場合は成人前から教会で神に仕えるという生き方だ。

たとえ女神様に聖女様として選ばれたとしても、一人の人間であることに変わりはない。

この国では、人としての尊厳を守りながら聖女様として崇めるが、自由を奪うことのないように聖女様にいくつも選択肢を与えている。

聖女様はなぜか貴族の出身ではないことが多く、性格もさまざまだという。人見知りで社交の場を嫌がり、教会からあまり出たがらない者もいれば、保護に従事した貴族の下で積極的に学び、社交デビューを果たした者もいる。また王家や高位貴族に嫁ぎ、聖女様の力と教会からの肩書を使って国に大きく貢献したいと願う者もいた。

国と教会から求められる聖女様の役目は基本的に二つだけで、常に束縛されるわけではない。

月に一度、大聖堂で女神様への祈りを捧げること、そして医師でも解決できないレベルの病に対して依頼を受け、聖光魔法による治癒を行うことだ。

それは教会に住もうが、貴族の養子になって王家に嫁いで王妃となろうが変わらない。

聖女様の自由を奪うことは、力そのものを奪うことになる。

だからこそ、昔から考えられている役目以外に何かを強要することはないと、聖女様について知っていたおれに父様が教えてくれた。

聖女様は基本の務め以外は自由とされている。そもそも、そこにいるだけで周囲を浄化し、国に幸福をもたらす存在だから、自由を奪ってまで酷使くししたりしない。

その方針は、乙女ゲームの展開ともどこか繋がっている気がした。ヒロインは聖女でありながら、エンディングでは選んだ攻略対象ごとに違った結末を迎えていたからだ。

結末は——確かこうだった。

レオンハルト殿下を選べば、この国の王妃になって国母になる。

イグニスなら市街で二人暮らしをした後、近衛騎士団長の妻になって社交の場で活躍する。

ヘルリを選べば郊外の屋敷で魔法研究を手伝いながら妻になり、新しい魔法を生み出す。

大司教となるマイズと結ばれたら、大聖女として教会で過ごす。

そして、まだ出会っていない隣国からの留学生と恋に落ちた場合は、確かそのまま隣国に嫁ぐという結末だったはずだ。

壮絶な過去を持つ攻略対象者を救い、心を通わせる。

そして、悪役令嬢の死と破滅。その先に、小さきままな優しいエンディングを迎えてハッピーエンドが待っている。それが乙女ゲームのシナリオだった。

そして社交デビューを祝うための卒業パーティというめでたい場での断罪劇、その日がシャルティの運命の日になる。それは同時に、サングイス公爵家の破滅が決まる日だ。

おれが学園にいられる期間では足りない。

義妹のシャルティと同じタイミングで卒業はできないから。

それでもできる限りの準備はしてきた。

あとは、ここから学園編でもっと決定的に状況を変えれば、なんとかなるはずだ。

シャルティは悪役令嬢らしい振る舞いなど全くしていない。攻略対象者たちとも、まだ出会っていない一人を除いて、良き友人として関係を築けている。

しかし不安は消えない。ヒロインちゃんが現れた瞬間に強制力が発動したらどうしよう、などと

考えてしまう。

今までの記憶が全てなかったことに……流石にそこまではないと思うが、正直なところ怖かった。おれとシャルティを忘れないでね……いや、適度に忘れてもいい。

だからそのまま断罪ルートとかに移行せず、ヒロインと普通に幸せになつてね!!

という気持ちを込めて、いくつか手を打った。

まず、イグニスと協力し、宝石に魔力を込めて装飾する手法を生み出した。

それで家内安全的な気持ちの魔力を込めてピアスやネックレスを作り、お守り効果を付与して攻略対象者にプレゼントしてみたし、ついでに最後の思い出作りもした。

また、庭でピザを焼いたり、サングイス公爵家の別荘にみんなを招いてお泊り会なんてこともしたり……そんなふうに、穏やかで楽しい日々を送った。

いろいろなことをしたり考えたりしているうちに、時間だけがどんどん過ぎていく……

聖女様がレルム伯爵家で健やかに過ごしているという噂を小耳に挟みながら、楽しい学生時代の思い出作りをしていると、おれはあつという間に二年生に進級した。

そして、シャルティが学園に入学する日になつてしまったのだ。

「シャル、入学おめでとう！ 制服すごく似合ってるよ、目に入れてもいいくらい可愛い！」

入学式の準備で生徒は少し早めに会場入りするからと、出発の準備をしていた我が家の馬車。

「大げさですわよ？ けれど、ありがとうございます、今日からお義兄様と同じ学園に通って嬉し

いですわ」

「……と、レオンハルト殿下もおめでとうございま……あの、なぜここに？　というか、なぜ同じ馬車に!?」

我が家の馬車なのに、どういうわけかレオンハルト殿下が乗っていて、現在一緒に登校中だ。「なぜって、ルディヴィスは俺の婚約者候補だからな。愛しいお前とやっと同じ学園に通えるんだ、共に登校したいのは当たり前だろう？　安心してくれていい、事前に公爵殿には許可を貰っている」

広々とした馬車なのに、レオンハルト殿下はおれを壁際に押しやっけて隣に座る。

それだけに留まらず、イケメンがイケメンに笑いながら肩を抱いてきた。

……近い！　レオンハルト殿下が近い！　イケメンな顔面が近い!!

こういうのはヒロインに対してやるんだよ、モブ野郎にしないで！

「お義兄様と殿下を見てると微笑ましいですわ。ふふ、明日からの学園生活がとても楽しみ」

「微笑ましい婚約者同士、うん、良い響きだと思う」

「婚約者じゃなくて候補ですよ、候補。いろいろな意味でドキドキするんでやめてください殿下……！　ううつ、それからシャルは適度な距離感を学ぼうね……」

髪型以外の見た目がほぼ乙女ゲームと同じに成長したレオンハルト殿下は、超絶イケメン王子様にしっかりととなっている。

むしろゲームよりも王子感が五割増しになっているからか、優しい見た目なのに男らしい口調と

いうギャップが多くの女性のハートを突き刺している。

肉壁婚約者候補のままではあるが、当然のことのようにモブの肩を抱いて笑顔を見せてくるのはまだ慣れない!!

向かいの席ではシャルティが「仲がよろしくて素敵ですわね」とニコニコしているが、正直助けがほしい。

しかし可愛いな、おれの義妹。

乙女ゲームがこれから始まるのに、レオンハルト殿下は悪役令嬢の乗る馬車にいても良いのだろ
うか……？　出会いの場面、どうだったっけ？

全く思い出せないが、これからオーブニングのある校門前に行くわけだから気を引き締めよう。
従者のヘルリとマイケルが窓の外でかつこよく馬を乗りこなしているのを見てそう思った。

ついに、今日、乙女ゲームが本格的にスタートする。

馬車はいつものように渋滞することなく、聖ラピスチアーノ魔法学園へ向かっている。

おれは一年間見続けて見知った校舎、しかしシャルティとレオンハルト殿下にとっては初めて見る校舎……それが目の前に広がる。

キラキラした目で馬車の外の景色を眺める二人とは裏腹に、おれの心境は若干恐怖を孕_{はら}んでいた。
すでに乙女ゲームの開始と少々様子が違うからだ。

イケメンを横に、クソ妹が見せてきたオーブニングを必死に思い出したけれど、よく考えたら、

ゲームのシャルティはわがままだったから入学式が始まるまで校舎に行かない。

つまり、悪役令嬢が現れるのは今向かっているオープンングの場じゃない。

だけど、このままだと悪役令嬢一家と攻略対象と一緒に登校コース、が確定になる。

いいの？ いいのかな……？

いや、しかし一緒に登校できませんんて言う気持ちにはなれない。

入学おめでとう！ って嬉しい気持ちのほうが勝ってるから言えない。

オープンング、別にちよつと違ってても大丈夫だよね……？

おれは全ストーリー覚えてるわけじゃない。そもそもタイトルすら時々間違えるくらいだし。

元々興味なんかなかったのに、クソ妹に見せられ続けてきたっただけ。

だから、知らない描写も多い。

いや、よく考えろ、おれ。

ヒロインがいつ登校するかもわからないし、そもそもおれはレオンハルト殿下が登校するタイミングも知らないんだ。

乙女ゲームのオープンングなんか、時間が書いてあるわけないし、わかるはずないじゃん！

なら最悪、ヒロインとシャルティが邂逅するのを防げればセーフだ！

脳内会議が終わると、間もなく馬車が止まった。

風に吹かれて桜の花びらが舞う校舎前に馬車が到着し、二人と共に校門へ降り立った。

高貴な美形が二人も馬車から降りてきたためか、周囲からざわざわと歓喜の声が聞こえたような

気がする。

これから入学式が行われる会場に進み、最初は生徒だけで学園長たちからオリエンテーションを受ける。その後家族が到着して入学式、それからクラス発表というのが去年の流れだ。

花びらが舞う中、嬉しそうに笑うシャルティとレオンハルト殿下の美しい横顔を見ると、ふと、ある場面が頭を過つた。

……そうだ、乙女ゲームのオープンング映像は恐らく入学式前、この段階で始まっていたような気がする。

そう、ちょうどこんな感じに花びらが舞って、少しだけ風が強くなるタイミング。

あ、あの子……おれたちの後からやってきたあの可愛い系女子。彼女みたいな感じで美しい校舎を見上げ、胸をときめかせたように学園名を呟いて……

そしてゆっくりと前に踏み出し、新しい生活にわくわくしすぎて足元が疎かになったのか……少し先の噴水の前くらいで小さく悲鳴を上げて転ぶんだ。

「きゃっ……！」

……え、まじで転んだ!?

今、「きゃっ！」って……転んだよね!?

え、待って？ よく見るとなんとなくヒロインカラーじゃないだろうか……

え？ ヒロイン？

あの子がヒロイン？

乙女ゲームのヒロインなんてスチルでしか登場しない上に、没入感のためにそこまで姿が見えないから、正直どんな子なのかと言われてもわからないんだけど！

ええっと確か……この後は、そう！ 地面に倒れ伏すヒロインらしき少女、そこにすかさず王太子であるレオンハルト殿下が「大丈夫かい？」って美しい微笑みと共に手を差し伸べるシーン！ヒロインの手を取り、優しく抱き起こしてからのタイトルコール！

……なんだけど。あれ？ ……何も進まない。

レオンハルト殿下？ ヒロイン倒れてるけど、どこ行った！？

辺りを見回すと、ヒロインが転んだ噴水の前からだいぶ離れた場所で、二人の会話が弾んでいた。「見る、シャルティ！ このベンチ！ 昨年ルディヴィスが入学した時に座っていた場所ではないか？ あの時、俺がその姿を絵師に描かせたいと言ったら、校門周辺でそんなことをするのは恥ずかしいと拒否されたのを思い出したよ。懐かしいベンチだな……一年間、ルディヴィスはここに座っていたのだろうか……」

「まあ！ 懐かしいベンチですわね。お義兄様がベンチに座りながら迷い猫を撫でている光景を今でも思い出しますわ。あら殿下ったら、一年間もずっとベンチに座っていたらお義兄様、成績落ちてしまいますわよ？ まあ！ 殿下、あの木の木陰とかで本を読むお義兄様もいたのではなくて？ きつと絵になりますわ」

「おお……！ 確かに！ 木陰で休むルディヴィスもきつと可愛いな……！ 今年からはそんな姿を間近で見られると思うと嬉しい、そうは思わないか？ シャルティ」

「ええ、まさにそうですわね」

攻略対象と悪役令嬢は、確かに昨年おれが座ったベンチを仲良く囲み、さらには奥の木陰を眺めながらはしゃいでいる。

聞こえないはずの距離なのに何言ってるかわかるんだけど……？

え、いや、こっち見て？ ベンチと木ばっかり見てないでこっち見よう？

ヒロインの聖女っぽい子が倒れてるから！

健気に助けてもらえる瞬間を待ち望んでるから！ 可哀想だけどおれが手を差し伸べちゃまずいんだ。関わっちゃいけない系モブだからおれ！ 断罪関係でも関わっちゃまずいんだよ！

声を出して呼びたいけど、それはそれで違和感がある。

しかしヒロインは倒れたまま、周囲もおれと同じく手を差し伸べる様子がない。

……てか、ヒロインもなんで起きないの？

一人で起きられるけど、起きない理由とかある？

オープニングだからなのか……？

それとも、これが乙女ゲームのスタートだから殿下を待っているのか……？

これもある種の強制力だったたり？

わからない、どうしたらいいかわからない！

慌てているおれに気づいたヘルリが氣遣ってくれるけど、ヒロインに近寄ろうとしないどころか、ヒロインのことが見えてすらいらない様子だった。それに、なんか違和感もある。

あれ？ おれたち以外に人がいない？　なんだ……？

これから入学式が始まるというのに、あまりにも人気がないことに気づいてしまい、やはりオープニングだからなのかと背筋に嫌な汗が流れ始めた時、全く想像しなかった声が聞こえてきた。

「大丈夫ですか？　お嬢様。怪我をされていませんか？　保健室へお連れします、お手をどうぞ。」
おれが覚えている乙女ゲームの台詞じゃない。しかしなんとなくそれっぽい台詞が、ヒロインのいるほうからはつきりと聞こえた。

誰が、一体……？

もしかして、ここは違うゲームの世界だった……？

知ってる展開じゃないことに驚きながら、正体を確認するためにヒロインが倒れたと思われる噴水の前にゆつくりと視線を向ける。

声のするほうには、キラキラのイケメンフェイスで有名な、我がサンゲイス公爵家が誇る護衛兼、従者兼、実は侯爵家の五男、という経歴を持つマイケルがいた。

そんな彼が、ヒロインと思いき倒れている少女に話しかけていた。

マイケル……！！

そう叫ばなかったおれは偉い、すごく偉い。

しかしマイケル、お前もおれと同じモブだよ？　モブなんだよ？

いや、見た目だけなら王子様、ほんとに面だけ王子様だけだね、マイケル！！

え、本当にヒロインカラーのその子連れれてくの？

お姫様抱っこされてる少女も嫌がってない感じだけど……まじで連れてくつもり！？

いい笑顔で「ちよつと女性に優しくしてきます」と口パクでおれに伝え、マイケルは立ち去っていくのだった。

その役目、レオンハルト殿下だよ！！　っていうおれの気持ちは一ミリも届かずに。

その瞬間、脳内にBGMとタイトルコールが流れた気がした。

『光の聖女へ愛を灯す』

あの乙女ゲームと似ているようで似ていないマイケルのオープニングが流れ、脳内でタイトルが浮かんできた。

さらにはマイケルが聖女らしき少女を連れていくと、途端に人気のなかった噴水の周囲に人が戻ってくるような不思議な現象も目にしたため、あの子が聖女で、いずれにしてもこの世界はやはり乙女ゲームだと改めて納得した。

これからレオンハルト殿下含め、攻略対象の皆はヒロインに出会って心から救われ、そして恋に落ちていくのか……そう思うとやはり寂しさがこみ上げてきてしまう。

「お義兄様、どうかされました？　あら？　マイケルはお手洗いかしら？」

「なんでもないよ、大丈夫。マイケルはさっき目の前で転んだ子を保健室に連れていったんだ。ほら、入学式が始まるよ。レオンハルト殿下は挨拶もあるし、そろそろ行こうか」

そう伝えると、二人は再び笑顔になって一緒に歩き始める。

ヒロインとの恋を邪魔するつもりは全くないが、今のまま、皆と仲良し友達ではいられなくなるのか、と考えてしまう。

シャルティの断罪回避に繋がるなら致し方ないけれど、それでもやっぱり寂しい……と、そんなことを考えながら歩いていて、おれって女々しい性格だったのかも感じてしまった。

これから始まる入学式のためにほかの生徒も進む大講堂へ向かう中、やはりレオンハルト殿下やシャルティはかなり目を引く。

その高貴な存在と見た目はもちろんだが、内面も素晴らしい二人だからこそだと一緒に歩いていて思う。乙女ゲームでは仲が悪かったのに、今ではこの通りと自慢したいくらいだ。

そんな美の結晶ともいえる二人と共に進むおれは、案内役の先輩ポジションなんだろう。

乙女ゲームではこの後、入学式中に怪我をして保健室に運ばれたヒロインが遅れて入場し、ちょうど新入生代表の挨拶をするレオンハルト殿下に聖女として紹介され、全校生徒が改めて聖女を知る展開が待っている。

まだ顔合わせもしていないが、聖女発見の時に王家の人たちは彼女に会っているはずだし、どうとでもなるだろうと考えていたが、ここでもおれの知らない展開が待っていた。

全員が大講堂に入場し、レオンハルト殿下は壇上で行う新入生代表の挨拶の打ち合わせをしてくるという残して先生の元に向かった。

それから普通に学園長たちからのオリエンテーションが終わり、保護者も集まって式が開始。しかし新入生代表の挨拶が始まってマイケルはまだ戻らず、聖女が来る気配もなかった。

聖女、来るよね？ という心配な状況に追い打ちをかけるように、壇上のレオンハルト殿下は、新入生代表の挨拶を乙女ゲーム通りにはやってくれなかった。

それだけでなく、なんかスピーチの最後に不思議なことを言ったのだ。

「堅苦しい挨拶は終わりだ。俺からは一言だけ言わせてほしい。偉大なる先輩たちに少しでも近づくため、勉学に励む新入生代表として、俺は飛び級を活用した！ よってここにいる新入生と同じクラスになることはない。しかし今年入学したことに変わりはない。共に手を取り合い、素晴らしい学園生活を送ろうではないか！ この学園の伝統を尊重し、高みへと向かおう！」

丁寧な挨拶の後、こんなことを言って壇上を降り、全校生徒から拍手喝采を受けるレオンハルト殿下……凛々しくも若々しく素晴らしい代表の挨拶で、思わずおれも感動したけど……

飛び?? え? なんて??

最後のほうは、途中から起きた歓声と拍手でよく聞こえなかった。

そのまま入学式は続いたが、来賓の言葉、教員紹介、学園生活についての説明と、去年と同じ流れで全てが進んでも、最後までヒロインは現れなかった。もちろんマイケルも。

教員から、今年は王太子殿下と聖女様が登校する特別な年度だと最後に伝えられたが、その聖女本人がいない不思議な入学式は、特にトラブルなく終わってしまったのだ。

在校生は先に教室へ、新入生は家族からそれぞれ入学の祝いの言葉を受けてから教室に移動と

なる。

おれは在校生だから自分のクラスに戻るため、聖女が遅れてきましたとか、そんな今後の展開を見ることができない。

今日はこの後、教室でクラスメイトと顔合わせをしてからは帰宅するだけだ。

あれ……本当にこれでいいのかな？

この後教室で——レオンハルト殿下に紹介される聖女様を見て、「殿下とお知り合いなんですか？」ってクラスメイトが驚く展開がなかったっけ!?

おれたち、まだ誰も聖女様に会ってすらいないけど大丈夫？

そんなことを考えながら、今年も同じクラスのマイズと、実は公爵家預かりになったことで騎士科から貴族科に転入したイグニスと合流して教室に向かう。

この学園は成績をベースにクラス分けをしており、おれは貴族科の中でも特に成績のいいSクラスだ。

本来の乙女ゲームの中では、一つ下の学年のSクラスには成績優秀なレオンハルト殿下とシャルティ、そして聖女も在籍するはずだった。

また悪役令嬢シャルティにはヘルリが従者として付くため、ゲーム開始直後に攻略を進められるのは殿下とヘルリ、そして鍛錬場にいるイグニスになるはずだったけど、ヘルリがおれの従者になってしまっていることとイグニスの貴族科転入で、一つ上の学年に殿下と留学生以外、皆揃って

る事実気づいてしまった。

ヒロインの攻略の邪魔をしたいわけじゃないのになんかごめん！　ってなったが、しかし、それだけではなかったのだ……殿下が言った新入生代表の挨拶の時の言葉だ。

その宣言通り、二年のSクラスにレオンハルト殿下の姿があった。

「本来は先輩と後輩になるが、飛び級を活用して二年Sクラスに在籍することになったレオンハルト・ロードヴィリアだ、よろしく頼む」

そしてあるうことか、その隣に並んでいたのは……

「同じく飛び級を活用しました、シャルティ・サンガイスです。皆様、よろしく願います」

「!？」

二年のSクラスに王太子殿下と悪役令嬢がクラスメイトとして登場してしまったのだ。

え??　飛び級って何??　え?　二年?　新入生……?　え?

アワアワ驚き動揺するおれを見て、新入生だったはずの二人はとんでもなく落ち着いた笑みを浮かべて「サプライズ成功!」みたいな顔をしている。

クラスメイトはもちろん大歓喜だ。

なんかもうお祭り騒ぎで「うちのクラスすげー!」と貴族らしくないテンションではしゃぎ、先生から「静粛に!」と注意を受けるまで興奮したざわめきが続いた。

「静粛に!」と言われたら静粛にしない、あー……この学園では成績優秀者への待遇として、一学年

飛び級ができる制度があったことを皆知っているか？ 相当な努力が必要だが、この制度でいち早く世に出て自らの力を発揮することが可能となる」

先生は二人を見て穏やかに微笑み、その努力を称えるように二年Sクラスの校章を手渡ししながら説明を続ける。

「本当におめでとう。二人とも、ほぼ満点は歴代でも類を見ない成績だった。いいか皆！ この度、レオンハルト殿下とシャルティ嬢はその制度を活用し、二年の教室で共に学ぶこととなる、成績を抜かれることがないよう、皆勉強に励むように」

大変おめでとう素晴らしい功績、けど、飛び級ってそんなのあったのか……!?

え？ え??

ってことは、このクラスに乙女ゲームの登場人物が集まりすぎじゃない?

……最後の一人、留学生がどこにいるかまだわからないが、攻略対象全員が乙女ゲームの舞台である一年生ではなく二年生のクラスにいる、その事実をどう受け入れていいか、わからなかった。

先生からの紹介を受け、教室全体が大歓喜している中、たぶん一瞬おれだけ静止していたと思う。それほどレオンハルト殿下とシャルティが飛び級したのは本当に衝撃的だった。

「どうしてこんなことに……」

そう呟いてしまってもしょうがないと思う……

だって見てくれ？ 誰に言ってるんだ見てくれって……同じ境遇、おれしか居ないわ。

乙女ゲーム始まったのに！ 乙女ゲームの舞台は一年生のクラスのはずだろ？

どうして聖女が舞台の一年生クラスにいるのに、なんで攻略対象ほぼ全員二年なの？

さらに悪役令嬢ボジまで二年ってどゆこと!?

新人生だけど、新人生じゃなかった！ っていう展開に、おれだけついていけないのだ。

マイズは知っていたようでニコニコしてるし、イグニスはずげー！ と普通に喜んでるし……ヘリリは知っていたようで二人におめでとうございますって言ってる……

え、本当におれだけ知らなかったの!? サプライズする相手だから？

「ん？ 何か言ったか？ ルディヴィス。ふふ、呆けてる顔も可愛い……これから同じ教室で勉強に励めるのは本当に最高だな！ なぁシャルティ！ 死ぬ気で頑張った甲斐がある」

「ええ、殿下！ 私たちの幼きころからの夢が遂に叶いましたわね！ お義兄様と共に学園生活を送りたい……！ サプライズ成功ですわ」

そんなことを言いつつハイタッチするほど仲の良いレオンハルト殿下とシャルティ……

え、今なんて言った？ サプライズ……？ この展開は過去に何か企みがあったの結果なのか!? おれの知らないところでそんなことを………そんな………どうしよう、嬉しい。

もうちょっと一緒に仲良く勉強できるってことじゃん？ 嬉しい……！

自由席でおれを中心に上下左右が乙女ゲームの主要キャラだろうが嬉し………いやいや、なんでおれを取り囲んでいるんだ!? なぜ!?

こうして、まるで魔法陣の中心にいる人のような気持ちを味わいながら、二年目の学園生活は幕を開けた。恐らく、ついに始まったであろう乙女ゲームのシナリオのオープニングと同時に……

でもこのシナリオ、おれが知ってるやつ、まだ一つも起きてないけどいいのだろうか……？

そう思い始めた時、シャルティの元に、聖女らしき少女をお姫様抱っこして保健室に向かったマイケルが帰ってきた。

「女性に優しいサングイス公爵家護衛マイケル、ただいま戻りました！」

……………うん、台詞が護衛っぽくないがそれはいい。

聖女？　だと思われる少女が大丈夫だったか聞いてみると、マイケルは笑いながら答えてくれる。「もちろんしっかりと保健室に送り届け、保健医の先生に預けようとしたのですが、寂しいから居てほしいと服を掴まれてしまひまして……服が千切れそうなほど強く掴んで寂しいと言われたら離れられず！　遅くなつてしまいました！」

息を継ぐ暇もなく、マイケルは一気にまくしたてる。

「流石に服が破れて、俺の鍛え抜いた胸筋を晒しながらここに帰ってくるのはまずいですからね……サングイス公爵家内ならまだしもここは学園！　捕まりますので諦めて話をしてたんです。そうそう！　転んだ彼女、仕事に戻ると伝えてもなかなか聞いてくれなかったんですよ……あ、実は噂の聖女様だったみたいで！　あなた誰？　とか、どうして学園にいるの？　とか質問攻めされてました。自分から質問したくせに、急に『シナリオがーっ！』て言つて、保健室から出ていってしまったんですよ。今代の聖女様は不思議な子かもしれません」

「た、大変だったね……？」

おれのねぎらいの言葉に、マイケルは笑顔で「大変でした」とだけ返答し、ヘルリと並んで護衛

に戻った。

マイケルからの話を聞いて、おれ以外は「ふーんなるほど？」で済んでいたみたいだが……

おれには聖女が放ったシナリオという言葉が怖くて仕方ない。

イケメンフェイスマイケルに思いつくままに質問するだけなら、女子として普通にありうる……

だが、シナリオという言葉……それは違う。

普通に生活してシナリオって言葉は、演劇に携わる人くらいしか使わないはず。

だから、なんで……聖女はそんな言葉を口にしたんだ……？

……………どう考えてもこの世界が乙女ゲームの世界だと知ってる、その可能性しか思い浮かばなかった。



レオンハルト殿下とシャルティの飛び級入学の驚きで始まった二年目の学園生活。

クラスメイトと共に授業を受け、乙女ゲームの開始にどう対応していくか考えつつ、学園ライフの日常を謳歌するんだと意気込んでいたんだ。

でもそんな悠長なことを言っている場合じゃなくなった。去年は歓迎される側だったから気づかなかったが、先輩になつて歓迎する側にもいろいろあると知った。

入学式を終えて一週間。

授業も始まり、新入生は各々学園生活に慣れようと努力し、おれたち先輩二年生には新入生歓迎会の準備をしながら、日々の授業をこなすハードスケジュールが待っていた。

「今年はお前たちが準備する番だな、これもこの学園の伝統！ 手を抜くことのないように協力し合って準備してくれ。ああ、飛び級の二人はもちろん免除だ、二年のクラスにいるが新入生だからな」

そう言つてホームルームの時間にラッジ先生が持ってきたのは、新入生歓迎会の運営手順書だった。

去年の新入生歓迎会で使用した物品や飲食、会場の準備の詳細などがびっしりと書かれている。おれを含め、クラス全員が「え？」って表情をした。

とはいえ——去年、盛大に新入生歓迎会をしてもらったのは事実だ。

そこで先輩たちから「これも授業の一環、来年はお前たちが準備する側になる」と笑顔で言われた記憶も確かにあった。

毎日、準備の時間が授業の一環として設けられ、各クラスで担当を決めて、一か月後の新入生歓迎会を成功させるべく作業を続けている。

おれたちSクラスは飲食担当だ。

「去年の新入生歓迎会は規模がすごくて普通に楽しんだだけだったけど……まさか生徒がここまで準備するものだったなんて。正直驚いた」

おれはクラスメイトと分担して、去年の明細をもとに飲食に関する予算を集計をしていた。

一方で、昨年度に取引があつた商人リストを確認していたマイズとイグニスも、それぞれ思ったことを話しはじめた。

「私もです、先輩たちはこんなに大変な思いで準備してくれたんですね……貴族の社交を学ぶ者として、これから茶会や夜会を企画するってことを考えると実践的な授業なんでしょうけど」

「騎士科だと歓迎野営っていうのがあつたから、たぶん将来に向けて準備をさせる授業なのは間違いないと思う。先輩たちの感じからするに『後輩を使つて学んだことを披露しろ！』ってノリだったな」

同じ作業をしているほかのクラスメイトと顔を見合わせると、なんでもないことにもなぜか笑えてくるから不思議だ。クラスメイトの顔ぶれが変わらないため、みんなどこか気心が知れた友人って感じがする。

なお、飛び級の二人は別室で特別講義を受けており、この場にはいない。

だからこそ——あの二人を迎える側として、より一層素晴らしい歓迎会にしなければ。

そんな思いが、クラス全体に広がっていた。

この新入生歓迎会は、去年参加した時のことを思い出すと夜会に近い。

前年度の記憶を頼りに二年生が企画書を作成し、準備を進め、当日の放課後に一年生と三年生を呼んで盛大に行う。

会場はこの学園の大ホールで、各々分担して準備をしていく。

かかる費用は全て学園持ちだが、何をするかを企画し、商家とやりとりするのは生徒の仕事だ。

ここで毎年、複数人いる聖女以外の特待生たちも、貴族にはない商家との繋がりを発揮して大活躍する。

この国で学園に通える期間は三年しかない。だからこそクラスが一丸となり、爵位の壁を越えて交流し、進級後も協調性を大切にするという学園からのメッセージが込められている気がする。

乙女ゲームのシナリオじゃ恋愛描写が主で、この学園の良さはそこまで現れてなかったんじゃないかな。

そういえば、新入生歓迎会はヒロインにとって重要な場面だったはずだ。

自身の能力を披露し、攻略対象や悪役令嬢と初めて公の場で接触する機会だから。

正確には、ヒロインと攻略対象者は同じクラスになるけど、庶民と貴族では大きな隔りがある。この時点では、レオンハルト殿下が王家としても大切な「聖女」として彼女を気にかけているだけの関係で、まだ恋愛には発展していない。

だから、悪役令嬢も暴走はしないはず。

だけど――

確か、歓迎会で事件が起きる。会場で具合が悪くなった生徒を聖女が聖光魔法で治療することで、会場全体に聖女という存在が明らかになるのだ。

その後、レオンハルト殿下とダンスを踊る展開があったはず。

――その光景を見た悪役令嬢シャルティが、聖女という存在を認識して嫉妬心が芽生える……そんな場面だったはずだ。

『きゃー！ 何度見ても好き、この初回ダンスシーン大好き！ レオンハルトがね、聖女ルシアに向かって「やっぱりお前がこの国の光なんだな」って手の甲にキスして、全校生徒の前でダンスするんだよ？ まさに王子様って感じじゃない？ まあお兄ちゃんがそんなことしても変態のセクハラ行為になっちゃうと思うけどさー。てか、お兄ちゃんってどん臭くてダンスなんて踊れないよね？ あはは!! やだ想像したら笑えるんだけど』

脳裏に嫌な声と記憶まで蘇ってきて悲しくなってしまった。

今ならたとえレオンハルト殿下が聖女と踊ろうが、うちの可愛いシャルティは嫉妬なんてしない、むしろおれとダンスを踊るのもありだ。

前世のおれはダンスなんか踊ったことなかったけどさ、今世のおれはシャルティにいいところを見せたくて無駄に練習してるんだ。

楽しい日々のはずなのに、この世界のシナリオを思い出そうとする度にクソ妹との会話まで蘇ってしまうのが正直辛い、おれの居場所なんてどこにもなかったあのころを思い出すのが辛い……

「……ス、ルディヴィス？ どうかしましたか？」

「え、あ、いや……なんでもないよ？ 大丈夫、ちよつと考え事してた」

マイズの声に目を向けると、イグニスと一緒に心配そうにこちらを見ている。

嫌な奴を思い出してしまったなんて言えず、二人に心配をかけまいと平静を装いながら準備を続

けた。新人生にとって大切な思い出になる日なんだから、邪念なんて取り去って準備を進めるべきだから。

新人生たちに喜んでほしい気持ちはもちろんありつつ、シャルティが断罪されないように、あの乙女ゲームとは異なる未来を少しでも描きたくて、歓迎会の飲食に、この世界にはないジャンクフードを取り入れようと奮闘して成功したのは、当日までシャルティたちには内緒だ。

イグニスやマイズも「それなら、いつもの軽食メニューに入れましょう!」「ジャンクな料理おいしいですよ」と、一緒になって先生やクラスメイトを口説き伏せてくれたのが面白かった。

その当日、今日一日は全ての授業が免除となり、新人生歓迎会の準備に当てられる。

ホームルームが終了してから大ホールに移動して準備、その後でリハーサルも行うというから本格的だ。

おれたち二年生は全員朝から大ホールに集まり、放課後に向けて準備を進めていた。

もちろん飛び級のシャルティとレオンハルト殿下は今日も特別授業。

流石に毎日特別授業は悲しいから自分たちも準備に参加したいと言っていた。

けれどそれも今日で最後だから、我慢してほしい。この日のために各クラスの生徒たちが必死に考え、準備し、盛大に歓迎する場を整えているんだからその気持ちを受け取ってくれ。

「イグニス! 軽食エリアの設営をしたい、机を運ぶの手伝ってくれ」

「ああ! 任せろ! どこに運べばいい?」

「「イグニスクん頑張つてー!」」

元々騎士科のイグニスは力仕事が得意で、朝から会場の設営で素晴らしい手際を見せていた。もちろん授業で習っている日常魔法の中に運搬系もある。でも先生ならともかく、おれたちの力じゃ微調整などに時間がかかるため、手作業でも同時に進める。

女子生徒からかなりの声援を受けてるあたり、イグニスもちろんと攻略対象なんだろう。

おれたちという時はかつこいいつていうより芸人っぽい感じで、そのギャップが妙に不思議だ。しかも、女子に向けられればいいのに、なぜかおれにウインクしてくる。

いや、何を目指しているんだ、お前。ほんと、楽しいキャラだ。

イグニスは天然癒し系だなど思いながら、おれは男子生徒とマイズと一緒に、商家に依頼した軽食以外の物を作っていた。

先生に許可を貰った軽食メニューにねじ込むジャンクフード。

今回は学園で、しかも高貴な食事をしてきた貴族の新人生が対象のため、見た目がジャンクになりにくいアイスクリームを作っている最中だ。

マイズが闇魔法でボウルを造形し、おれが泡立て器を作り出して水属性の男子生徒に氷の生成を担当してもらう。

氷でボウルの底を冷やしながら、甘味を加えた魔牛の生クリームっぽいミルクをおれはひたすらかき混ぜる。それはもう、全力で。

ハンドミキサーの生まれ変わりかって勢いがかき混ぜていた。

冷凍庫もハンドミキサーも存在しない魔法の世界。

現実と同じ名前の食べ物がある乙女ゲームの世界だけど、ピザが存在しないのと同じでアイスクリームも見たことがない。だからきつと新入生も喜んでくれるだろう。

とある国の珍しいデザートってことにすれば興味を引くはずだ。

それにしてもこのアイスクリームの製造方法、かなり効率が良い気がする。

閨属性を持つ人は少なすぎるし、いいイメージを持たれていない部分もあるが、温かみのある光属性の魔力とは真逆で、閨属性は平常時から冷たく熱伝導もいい。ボウルや泡立て器を生成するのにぴったリだ。

こんな応用もできるから最強ではないだろうか？

魔法で調理器具を作ろうとか、魔力の使い方を間違えていると言われそうだけど、マイズとおれの閨魔法は滅菌済みの調理器具として使えると、担任のラッジ先生と他学年の女性教員に精一杯プレゼンして説得できた結果、今に至る。

だからこれも魔法の使い方個性といえるはず。

先生たちの目の前で実際にアイスクリームを作り出し、試食まで行って許可を貰った最高の一品を前に、魔法の間違った使い方なんて言わせない。

むしろ新たな可能性として広めたい。

試食の段階でマイズのやる気が爆上がりしてたし、イグニスに至っては「なんだこれうつま!!」って叫んで魔牛のミルクを追加で仕入れられる商家を探してくると、そのまま窓から飛び出

していったくらい大好評のアイスクリーム。

まだシャルティたちには提供したことがないけど、きつと喜んでくれるはず！

新入生の緊張も甘味でほぐせるに違いない！

夕方までに何度も練り直して、超なめらかなやつを提供してやるからな！

そんな気持ちで必死にかき混ぜ、色とりどりのフルーツも加え、超なめらかな最高のアイスクリームが完成した。それを最高の状態で提供するため、溶けないようにマイズと一緒に人間冷凍庫までしているうちに放課後を迎えた。

新入生歓迎会の始まりだ……!!

聖ラピスチアーノ魔法学園の新入生歓迎会は、夜会のような方式で開催される。

まず新入生以外が入場し、ホールの中央を開けて左右に並び、学園長が壇上から合図をして一人ずつ新入生の名を呼び、呼ばれたら壇上に上がる。

在校生に新入生の顔と名前を伝える目的だが、今思えば、これも乙女ゲーム的には聖女であるヒロインにスポットを当てるべく計算されたシーンなのかもしれない。

「続いて、今代の聖女であり特待生、ルチア！」

「はいっ！」

ワァアアアアア……!!

「あの子が今代の聖女様？ 実際に見たのは初めてかも、すごく綺麗な目してるのね」

「レルム伯爵家でいろいろ学んできているらしいね、見てよ、素晴らしい所作だ」

「美しい、彼女が聖女様……！ 同じ学園の先輩になれるなんて光栄だ！」

そうそう、こんなふうにヒロインの名前が呼ばれ、「この国の新しい聖女が学園に！」って感じの歓声を受けて入場していた気がする。

天真爛漫な可愛らしいその姿に全校生徒が注目し、攻略対象者も聖女を見つめてこれからの個別の出会いに繋が……

「え、マイズ、聖女様見にいかなくていいの？」

「聖女様だけを見に行く必要はないですね？ 教会で顔合わせはしますし、……それに、私が今離れたらこの大量のアイスクリーム？ 溶けるのが早くなってしまいますよ？」

「んん？ あ、た、確かに……！」

マイズに言われて今の状況を思い出す。

おれたち二年生Sクラスの飲食担当は、最高の状態で出来たての料理を一年生に提供するのがミッションだ。

だから新入生入場後に式典を行う予定のホールの中央と人混みを避け、そこから離れた出入口近くの会場の後ろのほうで、闇魔法を含めた家電効果のある魔力属性を持つクラスメイト全員が協力し合い、アイスクリームの保温や保冷活動に勤しんでいた。

イグニスも「一年生、全員入場するまで時間あるから味見どう？」ってほかのクラスの生徒相手に料理を振る舞っているために忙しそうで、入場風景を見にいつてないことにも気づいてしまった。

つまり、誰も新入生の入場シーンを見ていなかったのだ。

どうしよう、攻略対象がヒロインの入場を見逃しちゃった……

いや、でも……この出来たての料理を提供しようと企画したのはおれじゃない！

新入生の緊張を甘くて冷たいアイスクリームで溶かしたいって必死に訴えて実行に移したただけだ。ヒロインの入場シーンを攻略対象の皆が見にいかないなんて想定外だ！

ま、まだ巻き返せる……！

このシーンで一番大切なのは、ヒロインが聖女としての力を発揮し、レオンハルト殿下とダンスを踊る場面だから！ これからが本番だ！

そう気持ちを切り替え、聖女様の入場に沸き立つ会場を遠くから見守っていた。

順番的に最後のほうで、シャルティとレオンハルト殿下が呼ばれると思っている。

二人が入場したら聖女と殿下がダンスを踊る前に、シャルティを聖女と接触させないようにこの軽食エリアに誘導しなければと思っていたが……

しかし飛び級なんて技を使った二人は、乙女ゲームと同じ行動をしてはくれなかった。

「最後に、飛び級で二学年に在籍しているレオンハルト・ロードヴィリア王太子殿下、シャルティ・サンガイイス公爵令嬢！ 我が校の新しい風となるだろう二人に、盛大な拍手を！」

学園長が生徒を一人ひとり呼ぶ状況を覆し、二人は一緒に入場するというまさかの斜め上の行動に出たのだ。

聖女様の入場の時よりもかなり大きな歓声が会場中に響き渡り、「お似合いの二人ね」などとい

う声まで聞こえてくることから、レオンハルト殿下がシャルティをエスコートして入場したのではないかと、見てなくても想像できてしまう。

乙女ゲームの展開にない、悪役令嬢と攻略対象が仲良く入場する状況。

二人にとつてはそこに特別な意味はなく、多分普通に「早く入場したいから一緒に呼んでもらおうぜ友よ！」って感じだったとは思うけど……

この状況を見たヒロインは何を感じただろうか……そんなことは想像もつかなかった。

校舎前で転んだ時を思うに、もしもヒロインも異世界転生しているタイプの子だったら……なんて恐ろしい想像をしてしまうが、おれ以外に複数転生しているとか、どんな確率だよって話だ。

きつと大丈夫。いろいろ状況が変わつてのゲームスタートだったから、まだちゃんと開始していないんだ。大丈夫、これからだ、まだチュートリアル的な状況だと信じよう。

ヒロインが攻略対象を救つて、悪役令嬢がヒロインの恋を邪魔しない、誰も不幸にならない展開にさえ持っていければなんでもいい。

レオンハルト殿下たちとおれの大切な友達、みんなが幸せになれるなら……

新人生歓迎会での交流が始まり、しばらく時間が経過したところ。

一人の生徒の具合が急に悪くなって辺りが騒然となった瞬間、美しい光のオーロラが会場中を包み込んだ。それはまさに聖女の御業、聖光魔法が発動した瞬間だ。

会場中が聖女様の力に感動し、興奮し、本当に今代の聖女がこの場にいる実感を得た歓喜の声が

聞こえる。

美しい聖女を前に、この国の第一王子、レオンハルト殿下は優しく微笑み、その手を取つて運命的な出会いの第一歩を踏み出し……

「……つていろいろこっちは悩んで考えてるんですけど、レオンハルト殿下、なんでヒロ……聖女様の素晴らしい奇跡の瞬間を見にいかないんですか！ あっちの人だから、間違ひなくこの国の王子を待つてますよ!？」

「俺は婚約者を放置して野次馬になるほど馬鹿な性格はしていない。それに聖女も一人の人間だ、王家の人間が逐一干渉していたら心身共に疲弊するだろう？ 用事があれば教会を通して話が来るから問題ない。それよりルディの手作りが食べたい、早く!」

さきほどもで会場中央で多くの生徒に囲まれていたレオンハルト殿下は、急に軽食エリアに現れて、噂のアイスクリームを食べさせてくれとおれの背中にしがみつきながらおねだりしてきた。

特別授業で疲れ果てた、聖女の奇跡は先代から見ているから間に合っているなどと言ってくる。

「特別授業が大変だったのはわかるけどさ、人前でアイス食べさせるとか作法的にまずいだろ？ てか、え、聖女様が学園生活に慣れるまで王家の人間と一緒に過ごすとか、ないの……?」

「いつの時代の話をしているんだ？ 今は聖女だからといって、すぐに王家で囲わなければいけない時代じゃない。王家が過度に介入したせいで自由がないと心を壊した者だってこれまでいたんだ。適度な介入と尊重、それが重要だと父上も言っていた、それより俺はルディにアーンしてほしい」

「そういうもののなの!? って、だからって人前であーんとか、何言ひ始めてるんだよ!!」

新入生歓迎会で使用される大ホールの片隅、聖女様が奇跡を起こしている現場から遠く離れた軽食エリアで、おれは、軽食を食べに来た新入生とクラスメイトの生温かい視線に包まれ、爆速でこちらに来ていたシャルティの「今日くらい許して差し上げては？」というとても発言を聞きながら、どうしてこうなったのかと現実逃避していた。

ヒロインはあっちなんです、あっちに行かないと幸せになれないんだよ！

アイスクリーム食べてる場合じゃないよ！！

とは思いつながら、子猫みたいな顔でアイスクリームを食べさせてくれて言うレオンハルト殿下を無碍にもできず、最終的に押し負けて、作ったアイスクリームを一口スプーンで食べさせる展開になってしまった。

「うん、やっぱりルディが作った物が一番うまい、この国で一番だ」

ヒロインに向かって使うような台詞、言わないで、レオンハルト殿下！！

非常に、すごく、恥ずかしい。

ヒロインがいるのに結局誰も側に行かなかったという、おれの知っている展開じゃない状況と、おれ自身は恥ずかしい思いをしてしまった。

けれど会場の準備を始め、出来たての軽食を食べられた新入生歓迎会は、例年でも類を見ないほどの大成功を収めたと先生方から褒められ、校内の雰囲気がいよいよ一層良い感じになった気がする。

それから数日後。

普通の授業に戻ったおれは、新入生歓迎会で王太子にアイスクリームをスプーンで食べさせる斬新な歓迎をした人だとしてばらく言われ続け、非常に恥ずかしい日々を送っていた。

貴族の礼儀作法的にはアウトだが、歓迎会という特別な場だからこそ妙に許されて困っている。

自ら望んでやったわけじゃないのに！ 酷い話だ。

隣の席に座っているレオンハルト殿下が無駄に嬉しそうなのがちょっと許せない。

婚約者じゃないんですよ、殿下？ 候補なの！

おれは断罪からシャルティを救う肉壁なんですって反論したいが、逆に「じゃあ、俺もルディにあーんすればいいのか？」って返されそうなので何も言えない。

そんな中で、おれは聖女様に関する話とあるクラスメイトから聞いた。

その男子生徒は新入生歓迎会の当日はずっと料理の保温を担当していたため、実際自分の目で見たわけではないが、先輩が見た話として教えてくれた。

歓迎会で具合が悪くなった生徒を救った聖女様は、その生徒に感謝された後、近くに居た男子生徒たちから女神様の生まれ変わりだと熱烈なアプローチを受けて困った顔をしていたという。

聖女様は「どうなってるの？」って相当焦っている感じだったが、最終的には歓迎会の雰囲気を楽しめたみたいで、たくさんの男子生徒と楽しくダンスを踊っていたそうだ。

生徒の中には、天真爛漫な可愛らしい笑顔に「この国の光、精霊のような聖女様だ」と、すでに崇拜する者も出てきているらしい。

その話を聞いて、乙女ゲームとは全く違う展開になっていると思っていたが、雰囲気はシナリオ通りに進んでいると感じた。

いろいろ想定外のこと起きてしまい、正常なルートに戻る途中なのかもしれない。であれば、これから始まるのはきつと各キャラとの個別の再会、出会いとストーリーの解放だろう。

本当なら新人生歓迎会を通して思い出したりとかいろいろあった気がするけど……

まあなんとかなっていくと思いたい。

それに悪役令嬢はまだ動かない時期、まだ安全だ。

何かバグってる世界 side 聖女

何かがおかしい、ううん、絶対におかしい。

待ちに待った入学式なのに、すごく楽しみにしてた大切な日なのに。

あたしの知ってる展開が何も起きてない。

でも、確かにあたしはこの国の聖女で、ここはあの聖フピスチアーノ魔法学園。

間違いなくあたしの大好きだった『光の聖女へ愛を灯す』の世界のはずなのに……どうしてオーブニングのレオンハルト殿下との出会いのシーン、知らないイケメンに助けられるの？

ものすごく優しくて攻略対象者!? っていうイケメンだったけど、あたしはあの顔を知らない。

すごいイケメンが優しくしてくれるから調子に乗って話しすぎちゃったけど、どうしても入学式が終わってるの？ 普通は聖女のこと待つよね？

あたしはこの乙女ゲームの主人公なんだよ？

しかも、なんで同じクラスに居るはずのレオンハルト殿下も、悪役令嬢も、その従者ヘルリも居ないの……？

ここは乙女ゲームの世界なのに、風景も何もかもがそうなのに……
そうだわ、きつと何かバグが起きているのよ。

あたしは聖女、あたしはこの世界で攻略対象者の心を救って恋に落ちて、最高のハッピーエンドを迎えるヒロインなんだから。

とりあえず攻略対象者がどこに行ったか捜さなきゃ、クラスメイトのみんな、あたしを「可愛い」って、「聖女様」って褒めてくれるけど、それじゃ満足できないの。

やっぱりレオンハルト殿下たちに言ってもらわないと意味がないの！

レオンハルト殿下たちはどこって聞いても「飛び級しました」って、訳わからないことを言うるし……みんな揃ってバグっちゃってるのかしら？

飛び級って何？

そんなの知らない。そんなの、この学園にあったの？

攻略サイトにも書いてなかったじゃない！

しかも、血の色の髪をしたあの悪役令嬢も飛び級ってどういうこと？

今の段階じゃ何もわかんない、けどシナリオを進めたら何かわかるのかな？

わかるよね！

あたしが主人公の世界、たくさん楽しみたいんだから早くバグ直つてよ。

木漏れ日の再会 side レオンハルト

今の俺は日々、充実感に満たされている。

ついにルディヴィスと一緒に学園に通うことができる、この日をどれだけ待ち望んでいたのか！ と、入学式前に喜んでいたのが懐かしい。

入学式の日、学園で会うまで待ちきれず、サンゲイス公爵にお願いして一緒に馬車で通学できたのはかなりの思い出だ。

互いに多忙のために月二回となってしまうた交流会で婚約者候補として会ってはいたが、それだけではどう考えても足りなかったのだから仕方ない。

一緒に登校してルディヴィスが通っている学園と一緒に見る、夢にまで見たことが現実になり、同じ夢を持っていたシャルティと熱く語ってしまった。

それでついつい二人で白熱し、ルディヴィスが座っていたベンチを絵師に描かせようかなんて話までしている。

なんでベンチなんて描かせるんだよって驚くルディヴィスもきつと可愛い。

入学式で新人生代表の挨拶をする俺を優しく見つめてくれる彼は昔から変わらず、優しくて信念があるように思う。そして、何より見た目も性格も全てが愛おしい存在だということは、婚約者候

補となった日から変わらないんだ。

ルディヴィスと話し、手を握るだけで幸せな気持ちになる。

心が救われたあの日を思い出すのはもちろんだが、本当に楽しくて愛おしくて、癒されて……ルディヴィスと過ごす時間全てが宝物のように思える。

魔力を学んでわかったんだけど、ルディヴィスは優しい魔力の持ち主だ。

それに俺との魔力相性が悪くないってことも愛おしい。

俺はルディヴィスが好きだ。

幼いころ、俺を認めてくれたから依存しているってわけじゃない。

一緒に過ごし、成長し、一生ずっと一緒にいたいと本気で思うようになった。

好きという気持ちが溢れて、愛しているという言葉に変わったんだ。

サングイス家の後継者問題、男の王妃という珍しさもあり、現状でも婚約者候補のままなのは事実だが、俺は諦めるつもりなどない。

現在も頭の硬い重鎮じゅうしんと戦う準備を進めている状況下にあると、父上と母上が婚姻まで大変だったということがよくわかる。

面倒な話をしてくる連中もいるし、このルディヴィスとの結婚は一筋縄ではない。

昨年保護された聖女を王妃に迎えてみてはどうかと言いつ出したのは、どの貴族だったか？ えっと、確か第二王子を王太子にと考え、因習とか古臭い考えを持った奴だ。

俺がどれほどルディヴィスを愛して、そのためにここまでどれだけの苦難を乗り越えてきたか知

らないのか？ と言いたくなるほど、唐突にそんな話が上がった。

聖女も一人の人間だと尊重し、特別視しないという方針が打ち出されてから何年経過したと思ってるんだ？ 聖女だからといって簡単に話を進めてこようとすることが腹立たしい。

もちろん、全ての貴族がそういうことを言っているわけではない。

父上も母上もルディヴィスの有能さを知っているし、俺の気持ちもわかっている。

しかし第二王子を推薦する大臣たちは、男の王妃よりも女性であり聖女であるほうが国にとっても価値が大きいと言うのだ。

同性の婚姻はまだ数も多くなく、男を求める王はいかがなものかと、不敬ギリギリを攻めてくる嫌な連中だ。

最近、父上が母上との婚姻を認めてもらうために好きでもない相手を側妃にあてがわれ、子を求められる苦痛を俺に教えてくれた。それが現実味を帯びてしまうから本当に辛い。

今となつては側妃も愛することができていると父上は言ってるが、おれは何があってもルディヴィスだけを愛していくんだ……そのためなら王位すらいらないと、心のどこかで決意している。

一応、次期王太子として、陛下たちと共に今代の聖女と顔合わせだけはしたが、美少女と呼ばれる部類の女、という認識しか生まれなかったというのが本音だ。

王族を前にしても全く不安な様子を見せず、自信に満ち溢れた笑みで挨拶してきたのを覚えている。

聖女が素晴らしい存在なのはわかる。